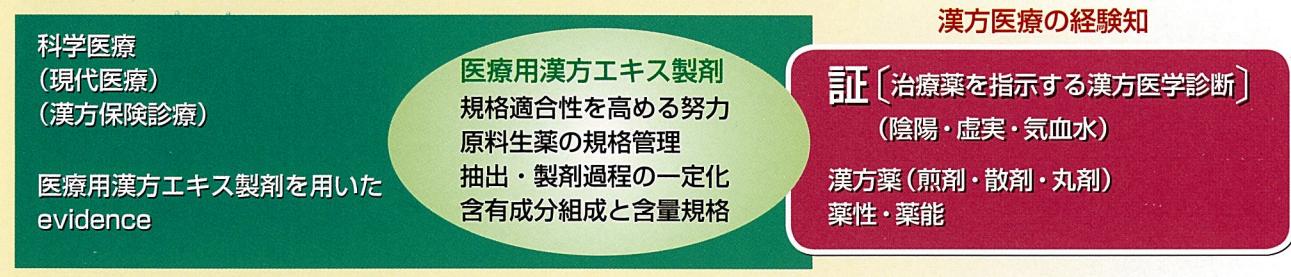


## 痰飲の病態と治療に関する基礎知識

大阪大谷大学薬学部 漢方医療薬学 教授 篠 忠人

### 図 1. 医療用漢方製剤療法

医療用漢方エキス製剤は漢方医療の経験知を現代医療で活用するために許可された製剤  
重要な基本的注意：使用にあたっては、患者の証（体質・症状）を考慮して使用すること。



### 図 2. 病理の実証と虚証（気血水の量と機能の過不足）

病理の実証は病邪の過剰・病理産物の停滞（鬱結）；機能の停滞・過剰亢進

気滞（憂鬱感、情緒不安定、胸が苦しい）	→	理気（四逆散、香蘇散）
血瘀（微小循環不全、打撲、月經不順）	→	活血（桂枝茯苓丸、桃核承氣湯）

水毒

水滯（浮腫、頭痛、めまい感）	→	利水（苓桂朮甘湯、五苓散）
痰飲（胃部停滞感、嘔気、乗り物酔い）	→	化痰（半夏厚朴湯、二陳湯）

◎日本漢方の水毒には水滯と痰飲が含まれる

病理の虚証は正気（気血水）の量と機能の不足

氣虛（脾胃氣虛：胃腸虚弱、疲労倦怠感）	→	補氣（四君子湯、補中益氣湯）
陽虛（気虚症状 + 全身四肢の寒証）	→	補陽（真武湯、桂枝加朮附湯）

血虛（貧血傾向、顔色が悪く艶がない）	→	補血（四物湯、當帰芍藥散）
陰虛（血虛症状 + 口乾、掌足心のほてり）	→	補陰（六味丸、滋陰降火湯）

◎この陰虛は中医学の病理論の陰虛であり日本漢方の陰虚証と異なる

### 図 3. 水毒（水滯と痰飲）の症状と調整生薬

水滯：生体の生理的な水（津液）の運行異常や偏在した病態

浮腫、尿量減少  
頭痛、めまい感  
下痢

熱証 → 沢瀉、車前子、木通、薏苡仁  
→ 黄芩、茵陳蒿、(大黃)

竜胆瀉肝湯、五淋散  
茵陳蒿湯

◎五苓散、猪苓湯  
苓桂朮甘湯 防已黃耆湯  
當帰芍藥散 真武湯

水様性鼻汁、冷え症

寒証 → 半夏、陳皮、厚朴、(生姜)

平胃散、六君子湯

◎半夏厚朴湯、二陳湯  
柴朴湯、清肺湯  
小青竜湯、參蘇飲

痰飲：とくに消化器系や呼吸器系の水滯

頭痛、嘔気、乗り物酔い  
食欲不振

寒証 → 半夏、陳皮、厚朴、(生姜)

平胃散、六君子湯

咳嗽、喀痰

熱証 → 桔梗根、桑白皮、竹茹、前胡  
寒証 → 桔梗、杏仁、(麻黄)

◎半夏厚朴湯、二陳湯  
柴朴湯、清肺湯  
小青竜湯、參蘇飲

## 1. 医療用漢方製剤療法(図1)

医療用漢方製剤療法(漢方保険診療)の前提は漢方医療診断(証)を考慮することにある。  
重要な基本的注意の「含有生薬の重複に注意する」ためには配剤生薬を知ることも重要。

**中医学の証:**自覚症状や他覚所見を総合して得る経時的な病態(疾病の病因、病位、病理など)の概要です。証を決定する方法として、八綱弁証(陰陽・表裏・寒熱・虚実)、気血津液弁証、臟腑弁証、病因弁証、六經弁証などがあります。

**中医学の弁証論治:**証に基づいて適切な治療法(補法や瀉法)を決め、具体的な生薬や処方を選択し投与します。

### 日本漢方の証

①その時点の症候群を②漢方医療の基本概念で整理し、③病態の特異性を示す症候群を「総合して」得られる④治療の指示となる診断です。

### 日本漢方の基本概念

傷寒論の経過診断(中医学の六經弁証)と腹証に基づく虚実診断、病理の気血水の病理(中医学の気血津液弁証)を重視しています。

医療用漢方製剤は漢方煎剤・丸剤・散剤とは異なる規格で許可されている。

(従来の煎剤・丸剤・散剤の内容を再現する努力はなされていますが、製剤として異なる面もある)  
(そのため漢方保険診療の evidence は医療用漢方製剤を用いた臨床評価が根拠となる)

## 2. 病理の実証と虚証(図2)

**中医学の(病理の)実証:**邪氣(病邪や病理産物)が多い(停滞した)状態を実証とみなします。実証を定義する「主語」は邪氣です。

**視其虛実、調其逆從、可使必已矣:**正気の不足(虚)と病邪の過剰(実)を診て、その過不足を調整すれば治癒する、というのが『黄帝内經』の理論です。

**有餘者瀉之、不足者補之:**有餘(過剰:実)は少なくし(or 移動し:瀉)、不足(虚)は補う(補)のが『黄帝内經』の原則です。

**消法:**停滞した過剰な病理産物を除く治療法です(広義の瀉法に属します)。

水滯 ← 利水渗湿、痰飲 ← 化痰

### 日本漢方の(体力の)虚実証

体力が虚衰し闘病反応の乏しい状態を虚証、充実し闘病反応が顕著な状態を実証とみなします。虚実を判断する「主語」は体力です。

### 日本漢方の(体力の)実証

体力を主語にする点は中医学と異なりますが、『黄帝内經』にも「必先度其形之肥瘦、以調其氣之虛實」のように肥満と痩せが気の虚実と関連する記載があります。実証を瀉法する点は同様です。

### 日本漢方の水毒

日本漢方の水毒は水滯と痰飲を含みます。これらを病理の実証と表現しませんが利水という「消法」を用いることは中医学と同様です(「水をさばく」と表現されます)。

中医学の実証は病邪の過剰なので水(津液)の停滞である水滯と痰飲は病理の実証に相当する。  
日本漢方の実証は体力が充実し闘病反応の顕著な病態であり、水毒を実証と表現しない。

## 3. 水滯と痰飲の症状と調整生薬(図3)

**水滯と利水:**腸管や組織間に停滞した病理的な水(浮腫)です。利水は水滯を血中へ吸収し腎臓から排泄する薬能と考えられます。結果的に利尿することになります。

**痰飲と化痰:**水滯の中でとくに胃と呼吸器系に停滞した水を痰飲と総称します。これを排除する薬能が化痰です。

**化痰薬:**半夏、陳皮、生姜、茯苓が消化器系に用いる基本的な化痰薬です。

**桑白皮、竹茹、前胡;**杏仁、紫蘇子、桔梗が主として呼吸器系に用いる化痰薬です。

### 水毒

浮腫傾向が重要な診断基準です。その他、排尿異常(多尿や尿量減少)、頭痛、めまい感、水瀉性下痢なども水毒症状です。臍上の動悸(腹部大動脈拍動亢進)も水毒と気逆や気滞に関連する所見です。

### 痰飲

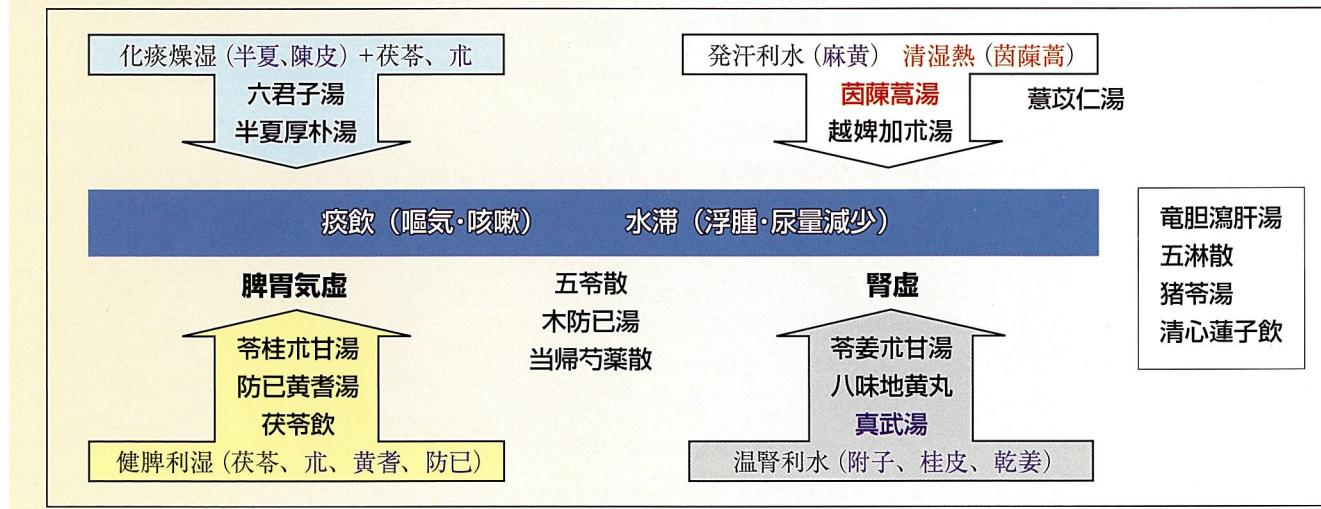
胃部振水音という所見と、胃部膨満感、恶心・嘔吐、乗り物酔い、咳嗽、めまい感などの自覚症状から診断されます。

### 胃部振水音

胃腔内の空気と胃液の停滞を診る日本漢方独自の腹診所見です。

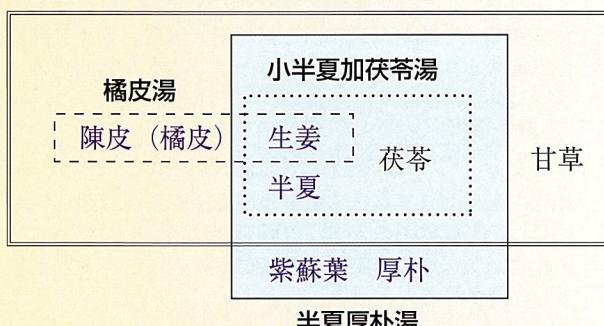
## 図4. 水滯・痰飲を誘発する病理の虚証（とくに脾胃気虚と腎虚）

◎水滯・痰飲の生成には水（津液）の運行と排泄に関する「脾胃と肺と腎」の機能が関与。

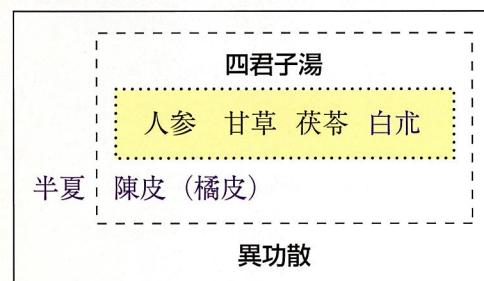


## 図5. 陳皮 (陳橘皮)、生姜、半夏を主とする消化器系に用いる化痰剤

## 二陳湯



## 六君子湯 (半夏白朮天麻湯も関連処方)



日本の製剤には（生姜、大棗）が加味されている

陳皮 (橘皮) : 苦、辛；温：理氣健脾、燥湿化痰：帰肺脾經 (陳皮は陳橘皮の意味)

生姜 : 辛、微温：解表散寒、温中止吐、化痰止咳：帰肺脾胃經

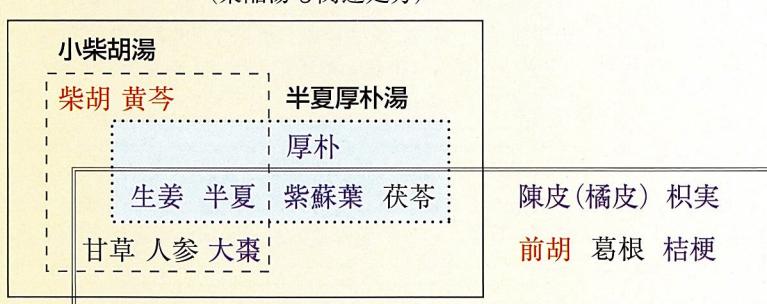
『葉徵統編』：主治嘔、故兼治乾嘔噫噦逆（嘔氣、からえずき、おくび、しゃっくり）

半夏 : 辛、温：燥湿化痰、降逆止吐、消痞散結：帰脾胃肺經

『葉徵』：主治痰飲嘔吐也、旁治心痛、逆滿、咽中痛、咳、悸、腹中雷鳴

## 図6. 呼吸器系に用いる化痰剤

柴朴湯 咽喉頭異常感症、気管支喘息の寛解期  
(柴陷湯も関連処方)



参蘇飲 胃腸虚弱傾向の人のかじれた時期の感冒、咳嗽

その他の化痰剤  
赤字：熱証用生薬  
青字：寒証用生薬

清肺湯 咳痰の多い咳嗽

化痰薬  
桑白皮、竹筍、前胡  
陳皮、半夏、生姜、桔梗

竹筍温胆湯 こじれた咳嗽、不眠

化痰薬  
竹筍  
陳皮、半夏、生姜、桔梗

麦門冬湯  
(麦門冬も化痰薬である)

## 4. 水滯・痰飲と病理の虚証(図4)

**脾胃気虚と水滯:** 脾胃気虚の結果として水分代謝が低下し水滯や痰飲(消化器系の水滯)が生じます(病理の虚実夾雜)。

**病痰飲者、當以溫藥和之:** 痰飲は温薬で脾胃気虚を調整し水分代謝を回復させて利水するのが基本です(健脾利水)。これは桂皮と白朮という温薬の配合された苓桂朮甘湯を用いる『金匱要略』の文章です。

**益氣利水:** 脾胃気虚を改善する補氣薬と利水薬を組み合わせて治療します(扶正祛邪:補氣という扶正が本治、利水という祛邪が標治)。

**温腎利水:** 中医学では水分代謝の主要臓器として腎を考えています。疲労感、腰冷痛、排尿異常を伴い下焦の水腫には桂皮と附子という補腎薬を含む八味地黄丸を用います。

## 5. 消化器系に用いる化痰剤(図5)

**化痰燥湿(理氣化湿):** 半夏と生姜と陳皮という化痰薬を中心とする処方で治療する方針です。中医学では二陳湯、日本漢方では半夏厚朴湯が基本処方です。

**半夏厚朴湯の薬能:** 理氣解鬱、和胃降逆、化痰止嘔、利水。嘔気に用いる和胃降逆剤(小半夏加茯苓湯)に理氣薬(紫蘇葉、厚朴)を加味した内容です。

**六君子湯の薬能:** 補氣健脾、理氣化痰、利水消腫。補氣剤(人参剤)の四君子湯に理氣化痰薬(陳皮・半夏・生姜)を加味した内容になっています。日本では生姜と大棗を配剤した8味の製剤が用いられています。

**半夏白朮天麻湯の薬能:** 熄風化痰、補氣健脾、利水。天麻が動搖感、めまいに有効だとされています(熄風薬)。

**平胃散(蒼朮、厚朴、陳皮):** 消化障害を伴う胃部不快感、腹部膨満感、腹鳴、下痢に用いる。  
**吳茱萸湯(吳茱萸、生姜、大棗、人参):** 冷え症の人の嘔気、シャックリ、頭痛に用いる。

## 6. 呼吸器系に用いる化痰剤(図6)

**嘔と発熱に小柴胡湯:** 少陽病期の主要症状の嘔気に半夏・生姜を用い、発熱(往来寒熱)に柴胡・黃芩を配したのが小柴胡湯です(不嘔の場合は半夏を除く指示があります)。人参と甘草を含むので補氣の薬能もあります。

**柴朴湯の薬能:** 和解半表半裏、疏肝解鬱、和胃止嘔、化痰止咳。小柴胡湯と半夏厚朴湯(とくに厚朴)の抗アレルギー炎症作用を期待して気管支喘息の長期管理薬(コントローラー)として活用されています(ステロイド剤の節約効果もみられます)。

**神秘湯:** 呼吸困難を伴う咳嗽に用いる。小柴胡湯、半夏厚朴湯、麻杏甘石湯の方意を含む。  
**參蘇飲:** 胃腸が弱く嘔気や心窓部膨満感を伴う長引く咳に用いる(抑鬱傾向)。

### 心下痰飲と苓桂朮甘湯

日本漢方では冷え症・胃腸虛弱傾向の人の(発作性の)のぼせ感、めまい感、立ちくらみ、動悸に苓桂朮甘湯を用います。茯苓、甘草、白朮という補氣薬を含みます。茯苓と桂皮の薬対が基本です。

### 風湿に防已黃耆湯

防已黃耆湯に配剤された黃耆と白朮は補氣と利水の効能があり、防已(中薬の青風藤)が利水薬です。水太り、関節水腫、変形性膝関節症に用いられます。

### 臍下不仁と八味地黃丸

日本漢方の腹診では軟弱な下腹部や知覚の鈍さを指標にして八味地黄丸を用います。排尿に関しては乏尿の状態や夜間頻尿の時もあるので「排尿異常」と説明されます。

### 咽中炙鬱と半夏厚朴湯

日本漢方では咽喉の閉塞感や異物感(咽中炙鬱:ヒステリー球)と嘔気や動悸がある神經症・気鬱傾向の人に半夏厚朴湯を用います。(日本漢方では「気剤」に分類されています)

### 食後の胃部停滞感と六君子湯

日本漢方では嘔気、食後の停滞感や眠気、疲労倦怠感の改善に六君子湯を用います。(いわゆる「慢性胃炎」やnon-ulcer dyspepsiaや運動不全型dyspepsia)

### めまい感と半夏白朮天麻湯

日本漢方では胃腸が虚弱で頭重感、めまい、立ちくらみ、嘔気を伴う場合に半夏白朮天麻湯を用います(起立性調節障害、起立性低血圧)。

### 柴朴湯

半夏厚朴湯と小柴胡湯との合方です。咽喉頭異常感症、心因性の空咳、心身症傾向のある気管支喘息の寛解期に発作予防薬として用いられます。

### 長引く咳に清肺湯と竹筍温胆湯

ともに喀痰の絡む咳に用います。清肺湯は気管支炎様症状、竹筍温胆湯は不眠を伴う場合に用います。清肺湯の気道分泌促進作用や喀痰の粘度低下作用が明らかにされています。